写真１　鉄製武器

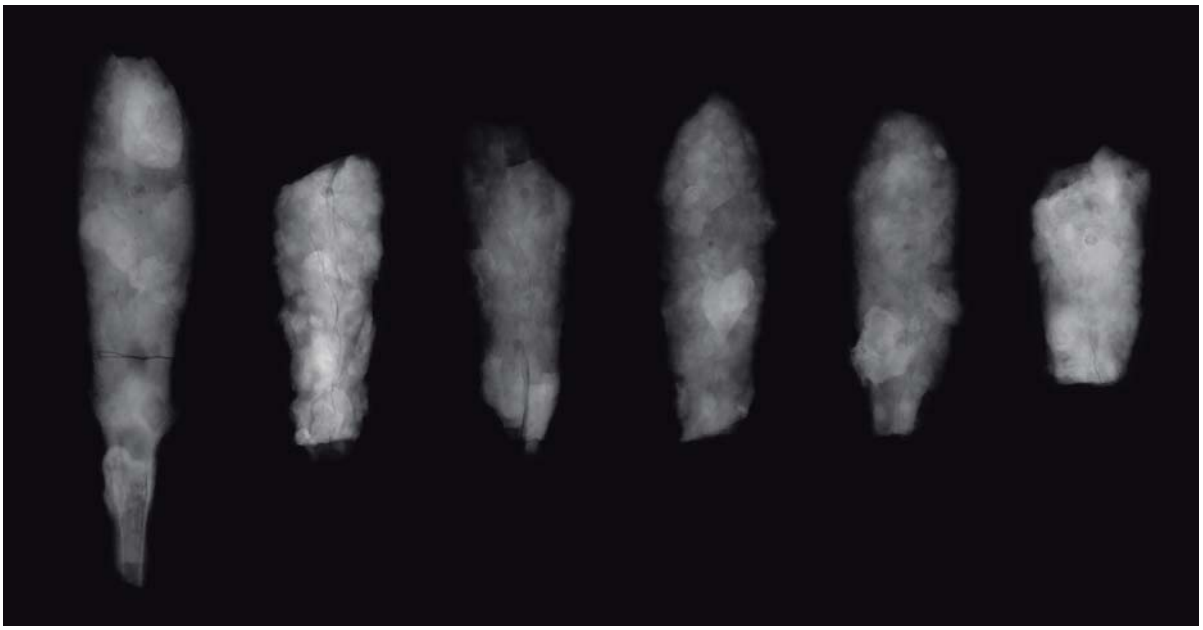


写真２　鳥舌鏃の円孔

写真 3　鉄製武具

宿寺山古墳の研究（2）

宇垣匡雅

はじめに

宿寺山古墳は岡山県総社市宿に所在する全長一一六ｍの前方後円墳である。所在地は吉備路風土記の丘地域の中央、備中国分寺五重塔の南で、吉備の巨大古墳として著名な作山古墳や巨大な石室で知られるこうもり塚古墳にも近い。

作山古墳に続いて築かれた首長墳であり、古墳時代中期の吉備の首長の動向を考えるうえで重要な位置を占める。この古墳からは鏡二面をはじめとする副葬品が出土したが、それらのうちのごく一部が伝わっているにすぎない。かつて出土したものの失われることになった副葬品の一部が以下に記すように再出土しており、これについて資料紹介を行う。この古墳の諸要素のうち、墳丘測量図や埴輪等については、かなり前のことになるが「宿寺山古墳の研究（1）」として報告しており（宇垣二〇〇二）、小論はそれに続くため表題を（2）とした。

一　墳丘と過去の調査記録

（一）墳丘と外表遺物

墳丘や埴輪・須恵器、また、過去の調査記録などについては前報告で記しており、それを参照願いたいが、古墳の基礎的な情報であるため要点を示しておく。

墳丘　前方後円墳　復元全長一一六ｍ、後円部径推定六四ｍ、同高さ一〇・九ｍ。

完全に埋没しているが盾形の周濠を伴う。周堤の一部が遺存する（図2）。

埴輪　円筒埴輪・朝顔形埴輪

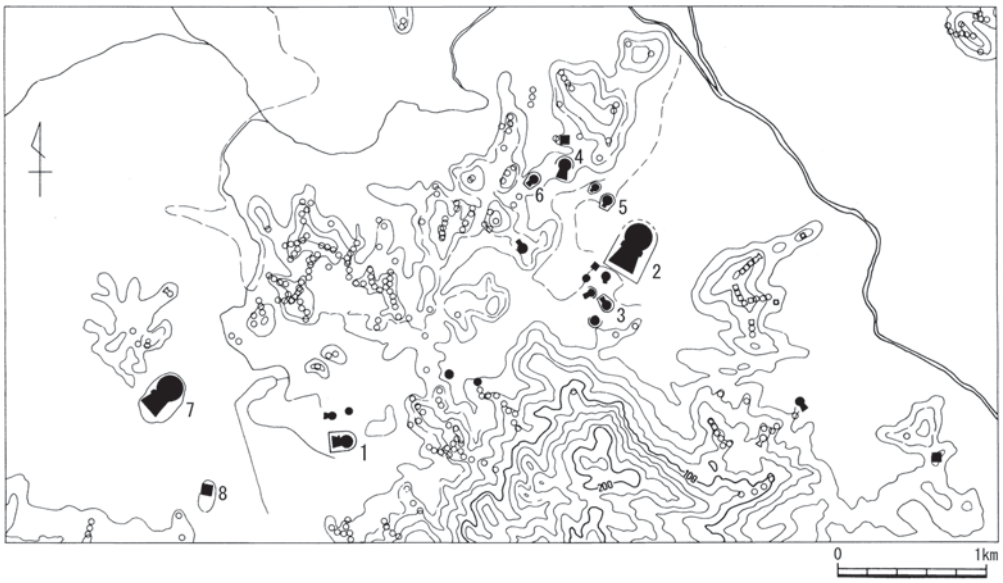
形象埴輪（蓋・盾・靫・肩甲・草摺・家）

土器　須恵器杯蓋・同器台　土師器壺

須恵器はＴＫ二〇八型式であり、円筒埴輪の特徴とよく整合する。古墳は五世紀後半の築造である。この古墳の特徴として、後円部掘削面の状況から墳丘全体が盛土で形成されたと判断できることと、完周する広い周濠をもつことがある。吉備の古墳では、丘陵を利用して築き盛土量はそれほど多くないものが多い。また、周濠も導入が遅く、周濠を設けても部分的な構築であったが、この古墳の段階でそれらが刷新されたと考えられる（宇垣二〇一四）。形象埴輪はいずれも小片であるが、器種が豊富で、首長墳の特徴を示す。このほか、後円部石室は幅一四五㎝と広いことも大きな特徴である。

（二）本墳の位置づけ

備中南部に形成される造山・作山古墳群は、二基の巨大古墳、造



1　宿寺山古墳
2　造山古墳
3　千足古墳
4　小造山古墳
5　新庄上車塚古墳
6　夫婦塚古墳
7　作山古墳
8　角力取山古墳

図１　造山・作山古墳群

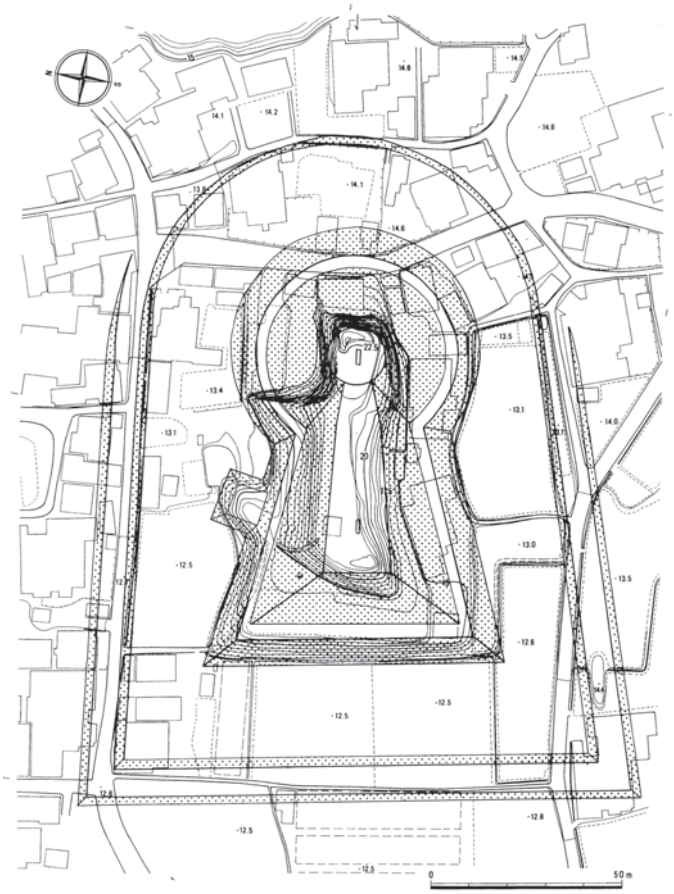


図２　宿寺山古墳墳丘　１:2000

山古墳（三五〇ｍ）、作山古墳（二八二ｍ）、それらの周辺域に築かれた大形前方後円墳である小造山古墳（一四六ｍ）や、角力取山古墳（四〇ｍ）などの方墳、そして一〇ｍ前後の円墳や方墳からなる法蓮古墳群といった大小さまざまな規模、墳形の古墳からなる（図１）。古墳群の形成は前方後円墳集成編年六期の造山古墳の築造とともにはじまり、五世紀後葉の八期まで続く。七期に作山古墳に続いて築かれるのが、ここで示す宿寺山古墳である。全長一一六ｍと大形には属するが、先行する作山古墳と比較すると大幅な縮小となる。その一方、この時期には備前において全長二〇六ｍで二重周濠をもつ巨大古墳、両宮山古墳が築造される。

造山・作山古墳群で宿寺山古墳に続いて築かれるのは帆立貝式古墳の新庄上車塚古墳（五〇ｍか）や夫婦塚古墳（四三ｍ）である。前方後円墳の築造はなされず、墳丘の規模はさらに縮小する。宿寺山古墳は、古墳群が巨大古墳の継続的な築造から吉備南部諸地域と同様なあり方へと築造の様相を転換していく、換言すれば、王権とこの地の首長との関係が大きく変化する時期の古墳である。同時期の両宮山古墳や先行する二基の巨大古墳と比較すれば小規模となるものの、中四国、あるいは近畿の外側という区分で見れば、有数の大形墳といえる。

（三）副葬品の出土

後円部から遺物が出土したのは一八八九（明治二二）年と一九二〇（大正九）年であり、前方部石室の発掘は一八九〇（明治二三）年とされる。一九二〇年の発掘から数年をへた一九二四（大正一三）年に梅原末治、森本六爾の両氏がそれぞれ調査に訪れ記録を残しており（梅原一九二五、森本一九二六）、この古墳についての貴重な情報となる。ただし、発掘から年月が経過していたためか(1)、両氏の聞き取り内容は必ずしも一致せず、不明確な箇所が残る。

両氏の記録をもとにまとめれば、以下の内容となる。

後円部石室：黄羊作獣帯盤竜鏡、変形四神四獣鏡、勾玉、ガラス小玉、刀剣一〇数点、鉄鏃多数、金製釵

前方部石室：鏡、冑、刀剣多数、鉄鏃多数

このうち後円部石室については、一八八九年の遺物の出土位置が、一九二〇年に遺物が出土し部分的に遺存していた石室よりも北に四間離れていたという聞き取りから森本氏は二基の竪穴式石室を想定し、梅原氏は一基の竪穴式石室から二度にわたって遺物が出土したと判断しているが、いずれが妥当か判断がむずかしい(2)。なお、図2での石室位置は筆者の推定である。

二　報告資料出土の経緯

一九八五年一二月にこの古墳を訪れた知人から、古墳に穴が掘られ鉄器が散乱しているとの知らせを受けたのが、この資料の回収に至る発端である。掘削の位置は墳丘測量図北側に明瞭に見られる造り出し部分の中央であり、長さ二ｍ、幅一・六ｍの平面形が長方形、深さ一・六ｍ以上の穴が掘られてゴミ穴として用いられており、掘削土に鉄器片が混じった状態であった。そうした資料を回収するとともに、掘削壁面の観察を行ったところ、南側壁面の中央、地表下一・五ｍの位置に、ある程度の量の鉄器片が遺存する箇所が見られた。鉄器片は破片の状態であり、これを包含する土は埴輪片、近世の

図３　造り出し上の掘削（南西から）

陶磁器片を含んでおり、下の層には近世以降の瓦片の包含が見られ、埋葬施設等に配置されたものではないと考えられた。

掘削壁面に残る遺物については、念のため葛原克人氏に立ち会いを願い、土地所有者の許可を得たうえで後日取り上げを行った。割れ口が新しい鉄器破片が不規則に集まった状態であり、古墳の遺構に伴うものではないことを改めて確認した。掘削壁面に接する位置に鉄器片のまとまりがあったことは確実であるが、それの平面的な広がり、掘削のさらに外側（墳丘側）に続くのかなどは明らかでない。その後、掘削土中の破片の回収に努めた。すでに穴にはかなりの量のゴミが投入されており、それを除去しての検索までは行えなかった。

図2に示すように、造り出し上面の現況の高さは前方部前側に設けられた畑の高さと等しく、推定される本来の造り出し上面よりもかなり高い。畑の造成のため前方部前側を削り、削った土を造り出し付近などに入れてかさ上げしたとみられ、鉄器片はそれに含まれる。鉄器類がまとめて廃棄されたわけである。この造成がいつごろなされたのかは不明であるが、掘削壁断面の西側にはこの造成土等を大きく掘り込んだ状況が見られ、それがかつてその付近に設けられたという防空壕のものであるとすれば、一九四五年頃よりも前となる。

これらの遺物が、後円部、前方部いずれの竪穴式石室から出土したものかは明らかにしがたい。前方部石室出土遺物として冑が伝えられ、それとの関連が考えられる一方、梅原氏の報文には古墳に後円部石室出土の鉄器が遺棄されており、それには「柳葉状に近い短剣形」の鉄鏃が含まれたと記されており、図6等に示す鉄鏃を指すように思われる。また、梅原氏作成の墳丘図ではすでに前方部の畑が形成されており、遺物は一八八九年出土と考えることもできる。

三　副葬品

鉄器は鉄刀、鉄剣、鉄矛、鉄鏃、短甲、頸甲、肩甲、馬具等と種類は多く、この古墳の副葬品の概略を知ることができる。ほぼすべての破片の割れ口は新しく、錆が付く古い破面はごくわずかである。元は完形の状態で遺存していたようである。

土が錆着するものは少なく、石室の空間に所在していたことがわかる。石室の礫敷は厚さ三〇㎝であったとされ、良好な環境であったと思われる。一部の鉄鏃をのぞいて鉄器の表面は光沢のある黒色を呈する。全体が安定した錆の状態に変化しているわけであるが、本体と錆のふくれに大きな差がなくなり表面が溶融したかに見える状態であるため、鉄鏃の細部形状や鋲の確認がむずかしくなっている。また、いずれも器壁が厚くなっており、本来の断面形は不明あるいは推定とせざるをえないものが多い。

（一）刀・剣・矛（図4）

鉄刀の破片八点、鉄剣の破片八点、茎の破片三点がある。刀1～8の身幅は、2：二・五㎝、4：二・六㎝、7：二・七㎝、1・3：二・八㎝、8：二・九㎝、5・6：三・〇㎝で、細身の刀からなる。2、5の下面側、7には木質が見られる。また、5には他の個体が、3

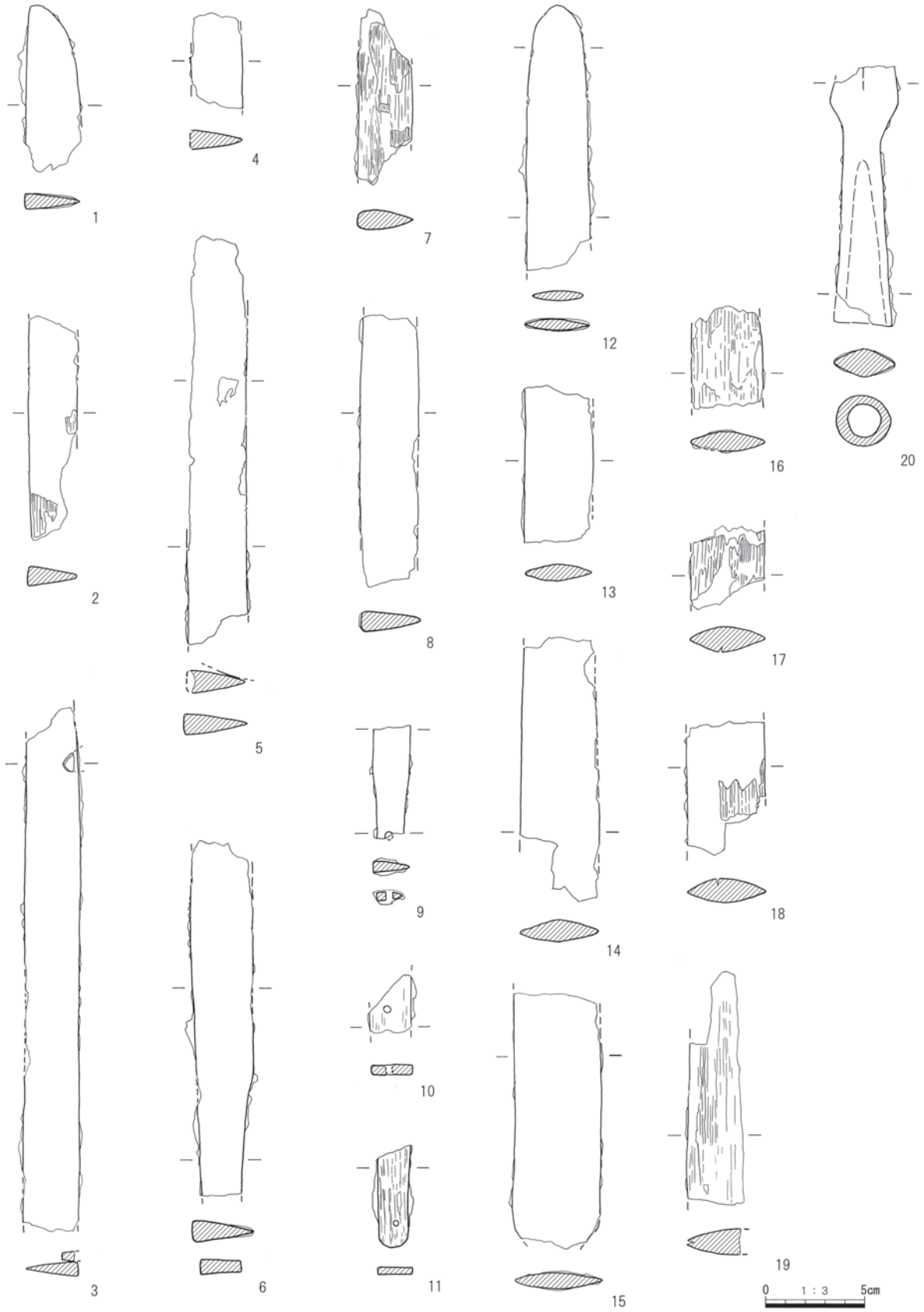


図4　刀・剣・矛　1：3

には別の製品が付着した痕が残る。なお、3の片面には部分的に薄く緑青が付着するが、158～160からの緑青かと思われる。6は刀身下部から茎にかけての破片で、関から緩やかに茎に移行する。9は小形の刀の関付近で、茎には目釘穴が残る。

鉄剣は身部下端の15で幅四四㎜である。16～19は木質がよく遺存しており同一個体の可能性もある。

茎10・11には目釘穴があり、表面には木質が遺存する。11の茎尻は丸く、剣の茎である。

以上の刀および剣は複数の個体からなるとみてよく、刀剣が多量に副葬されていたことを裏付ける。

鉄矛20は袋部から身部下端にかけての部分で、身部の断面は菱形である。関から先がかなり狭まるが、その先で細長くのびる形態かと思われる。

（二）鉄鏃

鉄鏃は短茎鏃、鳥舌鏃、長頸鏃などからなる。長頸鏃は少ないが、折損しやすいため十分に集められなかったのかもしれない。

短茎鏃（図5）　三角形に近い鏃身に薄く短い茎部が付く。逆刺の角度が広い21～24、鏃身が長く逆刺が長い25、鏃身幅が広い26・27に細別できる。28は茎部である。21～25には鏃身の中央に長方形の孔が設けられるが、22・25は錆によって孔が狭まり小さな円孔となっており、21・23・24では錆で完全に埋まって表面観察では孔を確認できない状態である。鏃身の表面には根挟みの木質が遺存しているが、22・24ではそれが孔をこえて上に続いており、孔が鏃身と根挟みを固定するためのものであることを示している。

29は扁平で幅がある小片で、下端に小さな逆刺がある。随庵古墳出土の大形短茎鏃（図13）には、長く逆刺がのび、それの内側にさらに逆刺が付くものがあるが、それと同様の鏃の破片と考えておく。30の形態は不明であるが、厚みのある鏃身が折れており、その位置から、長い鏃身であった可能性がある。

鳥舌鏃（柳葉C式）（図5～7）　31～64。上半部や下半部の破片を含むが、それらが同一個体になる可能性はほぼなく、三四点以上であったことになる[3]。山形関が明瞭でなくナデ関あるいは斜関になるものや、鏃身側面がほぼ直線でS字のカーブをなさないものを含む。最終段階の鳥舌鏃と判断する。

34を例にあげれば、全長一〇・四㎝、鏃身幅二・二㎝、先端から関まで八・〇㎝である。重量もあり、現状で31が四七g、35が四一g、49が三三gである。

先端が尖り気味のものや丸みの強いものなど、平面形や大きさはある程度のばらつきをもつ。44～47のように関まで刃が続くものが見られる一方、31や34などでは刃は関に達せず関上側の断面は長方形になるようである。後者は大きめの個体の特徴らしいが、厚くなる鏃身下半は錆による膨らみが顕著で、本来長方形の断面であるのかレンズ形断面が見かけのうえで長方形になっているのか判断しがたいものが多く、それらの断面は破線で示した。先端がわずかに欠損するものも含めてであるが、先端から関までの長さでは七・七～八・三㎝と七・〇～七・四㎝の二群に区分できるようである。

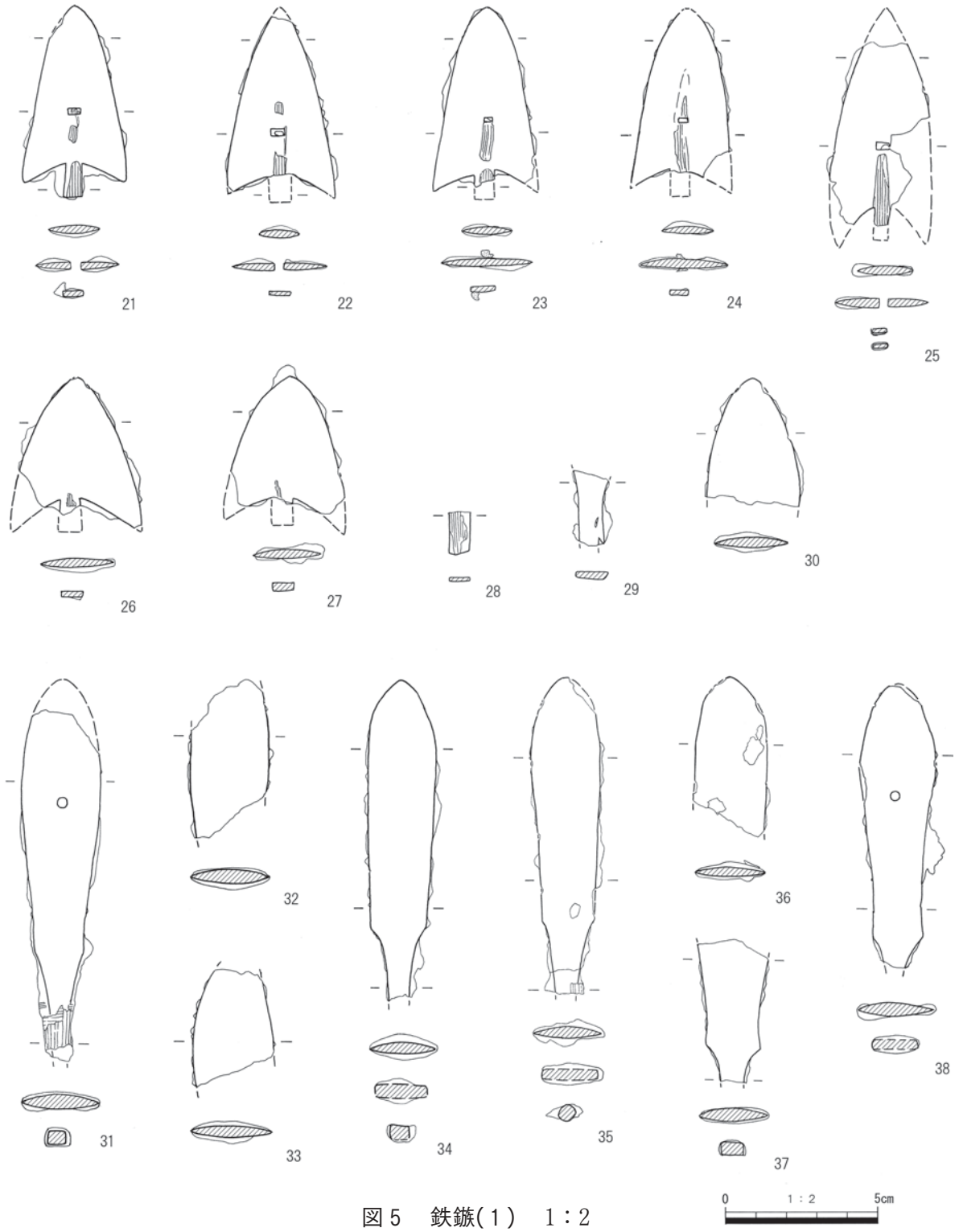


図５　鉄鏃(１)　１：２

矢柄との接続状態を残すのは31・35・49で、31では矢柄の木質と口巻きのおそらく樹皮が部分的に残る。

31・35・39・40・42・48・50・58・59・64では他の個体の錆着が見られ、48と64は付着していた可能性があり、これらは矢束の状態であったと判断できる。63には長頸鏃頸部が錆着している。また、34・40・41・47・50・53では他個体の矢柄であろうか、小さい木質の付着が見られる。

65・67は関が不明瞭になる。68は左右

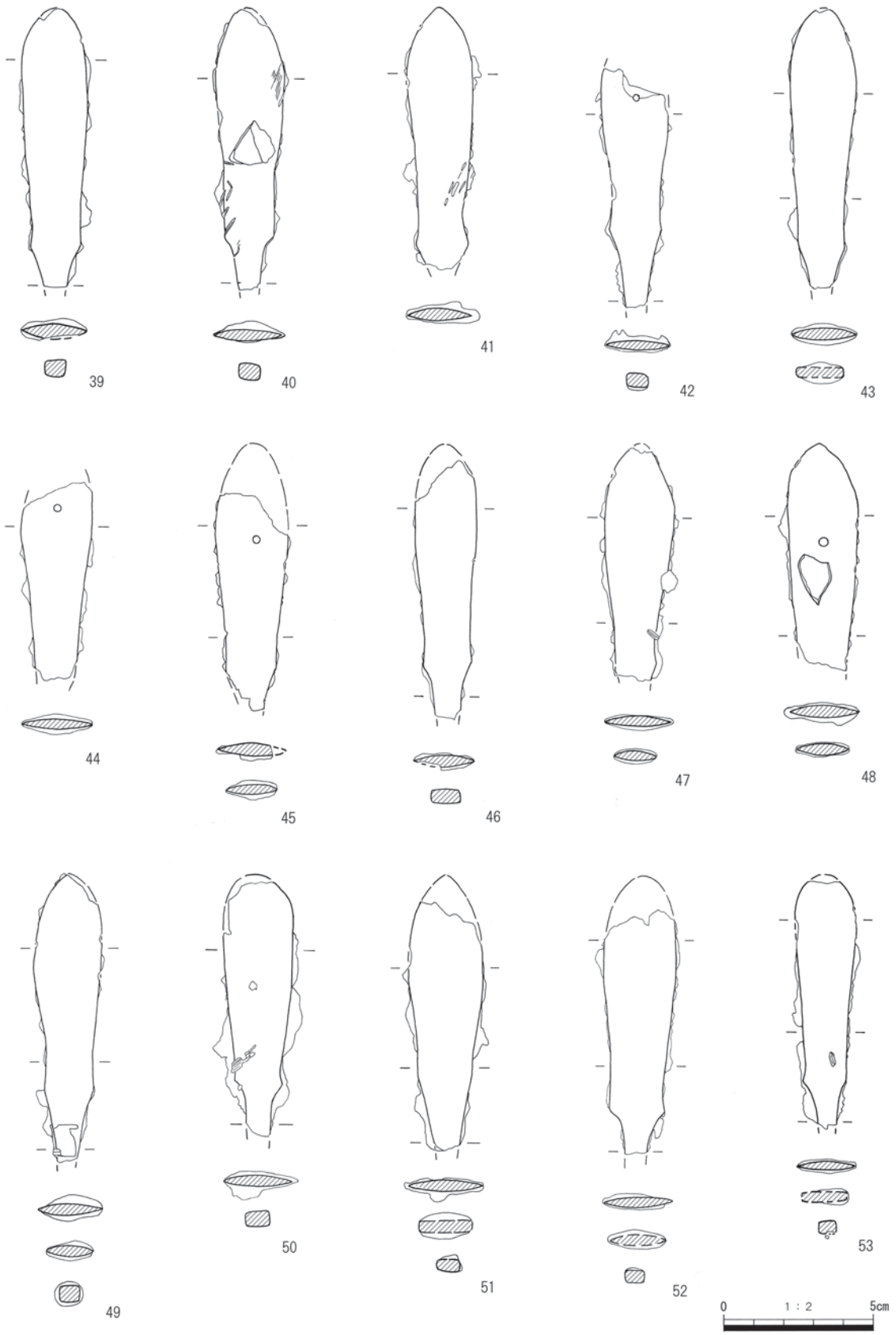


図６　鉄鏃(２)　１：２

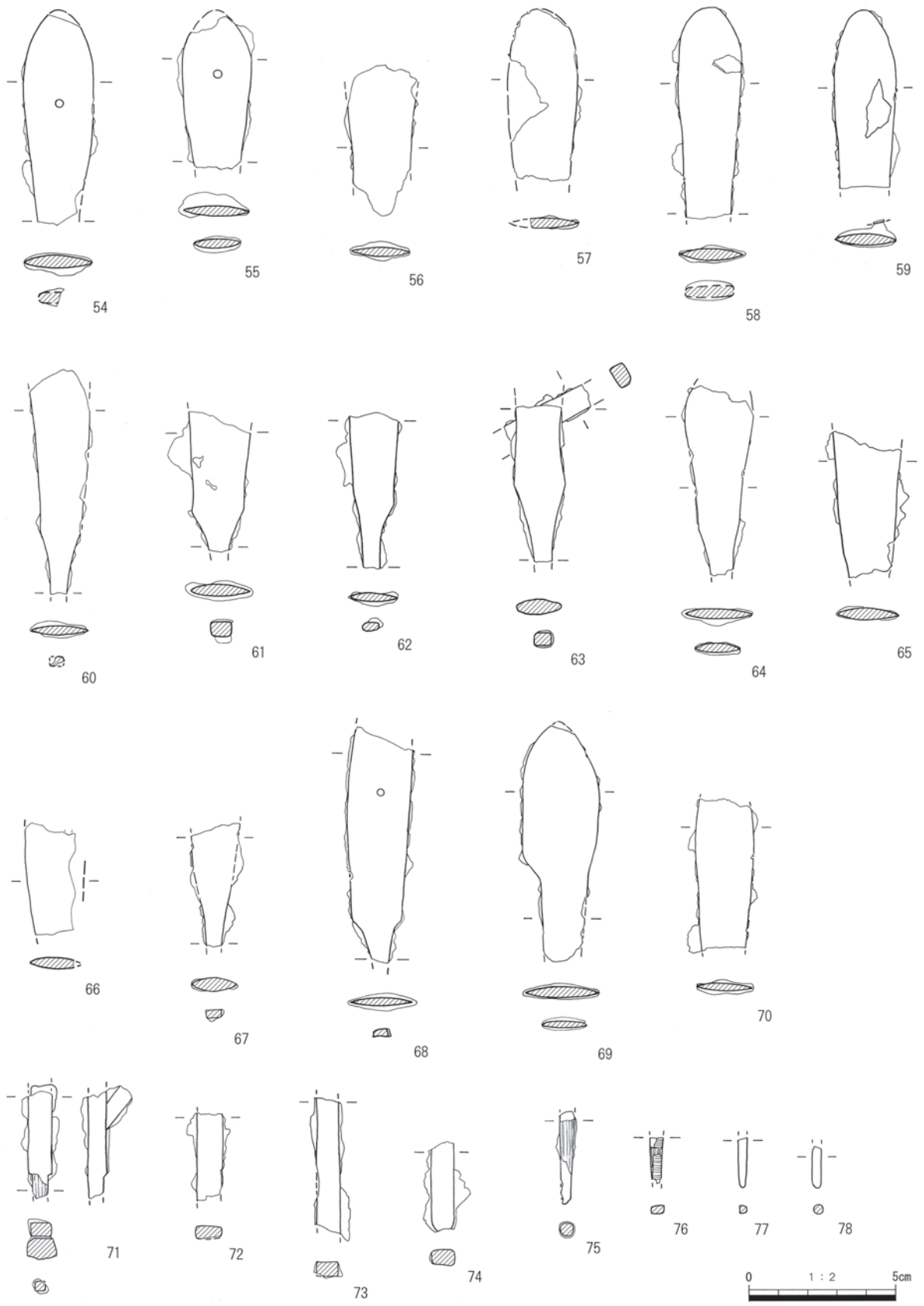

54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
0
1：2
5cm

図７　鉄鏃(３)　１：２

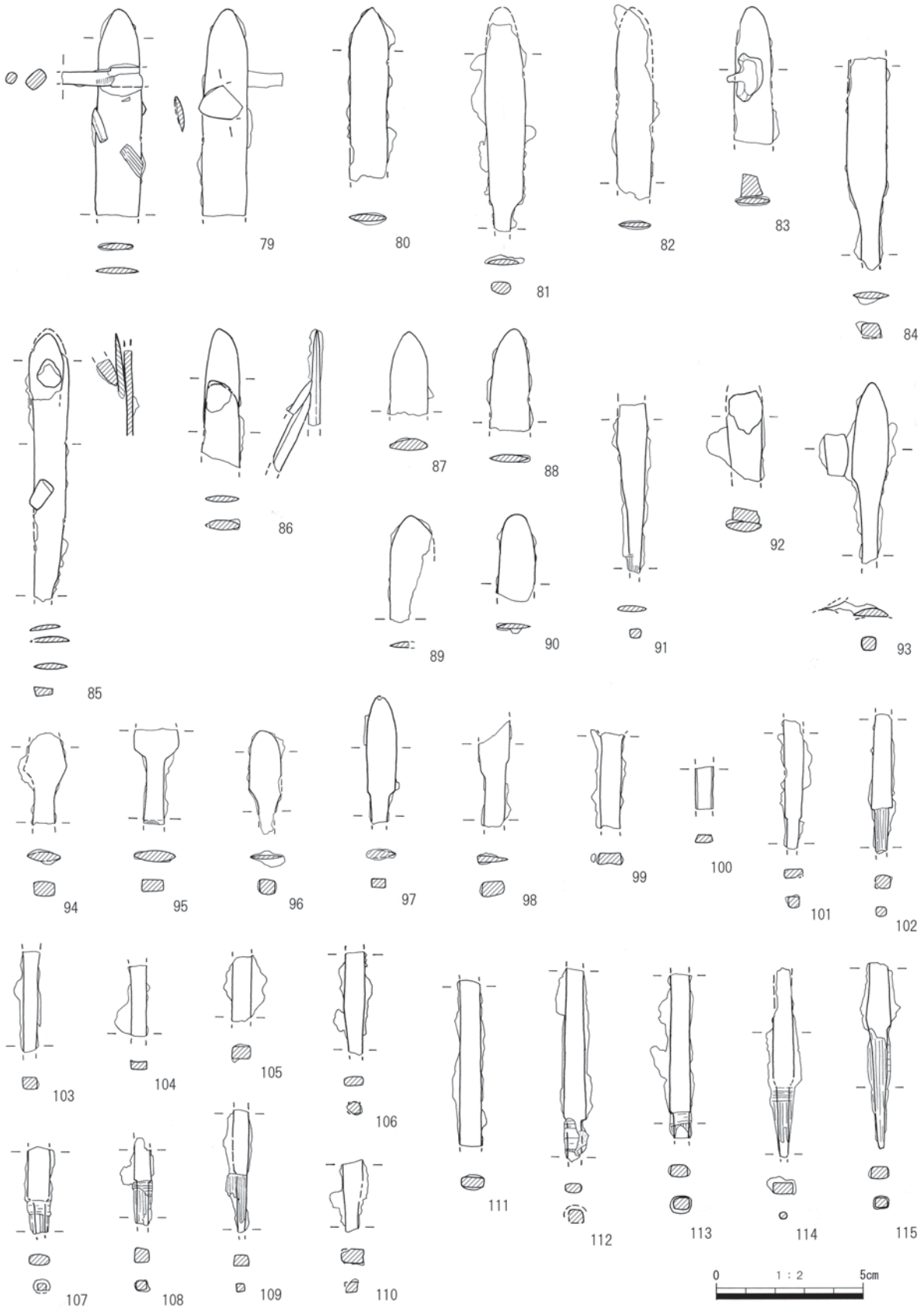

79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
0
1：2
5cm

図８　鉄鏃(４)　１：２

が非対称で鏃身の中ほどで身幅が広くなる。69の左下部分は古い欠損の可能性もあるが、図示した形状が本来と考えておく。70は細長く、両側縁は刃になる。これらは前記とは形態が異なり鳥舌鏃ではないが、類似した大きさであり銹の状態も同様で、一連の鏃として扱われたとみてよい。

円孔　以上に示した鳥舌鏃等のいくつかには円孔が穿たれている。すべて銹で埋まっており肉眼観察で把握できるものはなく、X線写真での確認である。円孔があるのは31・38・42・44・45・48・54・55・68である。69も円孔をもつ可能性があるが確定がむずかしく、上記の九点が有孔と判断する。鏃身下部のみの破片をのぞいた資料三二点のうちの九点が円孔をもつことになる。

円孔の直径はほぼ三㎜が多いが、若干小さい二㎜のものもあり同一ではない。すべて正円形で、目釘穴の穿孔と同じ手法で設けたと推定できる。

柳葉鏃（図8）　79～92。79が身幅一五㎜であるのに対し、80以下は一二～一三㎜で大きさが異なる。79には同形の別個体の先端が付着しており、このタイプも複数個体があったとみてよい。79は別に長頸鏃が付着している。これら三個体の向きは異なっており、そろえて置かれていない。

身幅が細い一群（80～92）は、剣形の鏃身で薄い造りである。80は左右対称であるが、86や88は先端がやや偏る。84は鏃身下半が狭まって角柱状の頸部を作り出すのに対し、85・91は緩やかに幅を狭めて茎に移行する。85・86・92では先端が重なった状態で銹着しており、矢束の状態であったと思われる。

長頸鏃（図7・8）　いずれも折損して小片となっている。鏃身は93～98があるが、形態は多様である。柳葉形の鏃身をもつ93は複数の個体が銹着した状態を示す。断面の下側が平坦であるが下の個体の影響のようであり、片丸造りと確定はできない。94～96は短く小さい鏃身である。98は片刃で、97も同様の可能性が強い。これらの頸部はいずれも細く、同様に細い103～106がこれに続き、さらに107以降がそれらの基部になるかと思われる。ただし、長頸鏃の頸部破片では幅が広くしっかりした造りの71～74があり、これが前記と一体であったとは考えにくく、異なる鏃身があった可能性がある。

柳葉鏃と長頸鏃のうち、79や93など一部は鳥舌鏃と同じ銹であるが、大部分は赤銹が付いており遺存状態がやや異なる。後述の短甲では下部の裾板等に赤銹が見られることから、柳葉鏃や長頸鏃の上に鳥舌鏃が置かれていた可能性がある。

（三）短甲

三角板鋲留短甲と付属具がある。重複する部位の破片は見られず、一領分である。

短甲（図9・10）　116は後胴押付板から上段帯金にかけての破片である。左破片の押付板には斜めに細い帯状のものが付着した痕跡が見られ、ワタガミの痕かと思われる。一方、右破片の破片左端近くには目がごく細かい布の痕跡が見られる。また、117では目の粗い布の痕跡がある。120・123・125は横方向のカーブをもたず、後胴中央の下側と思われる。128は前胴の竪上板。127は前胴引合板か。126は127に

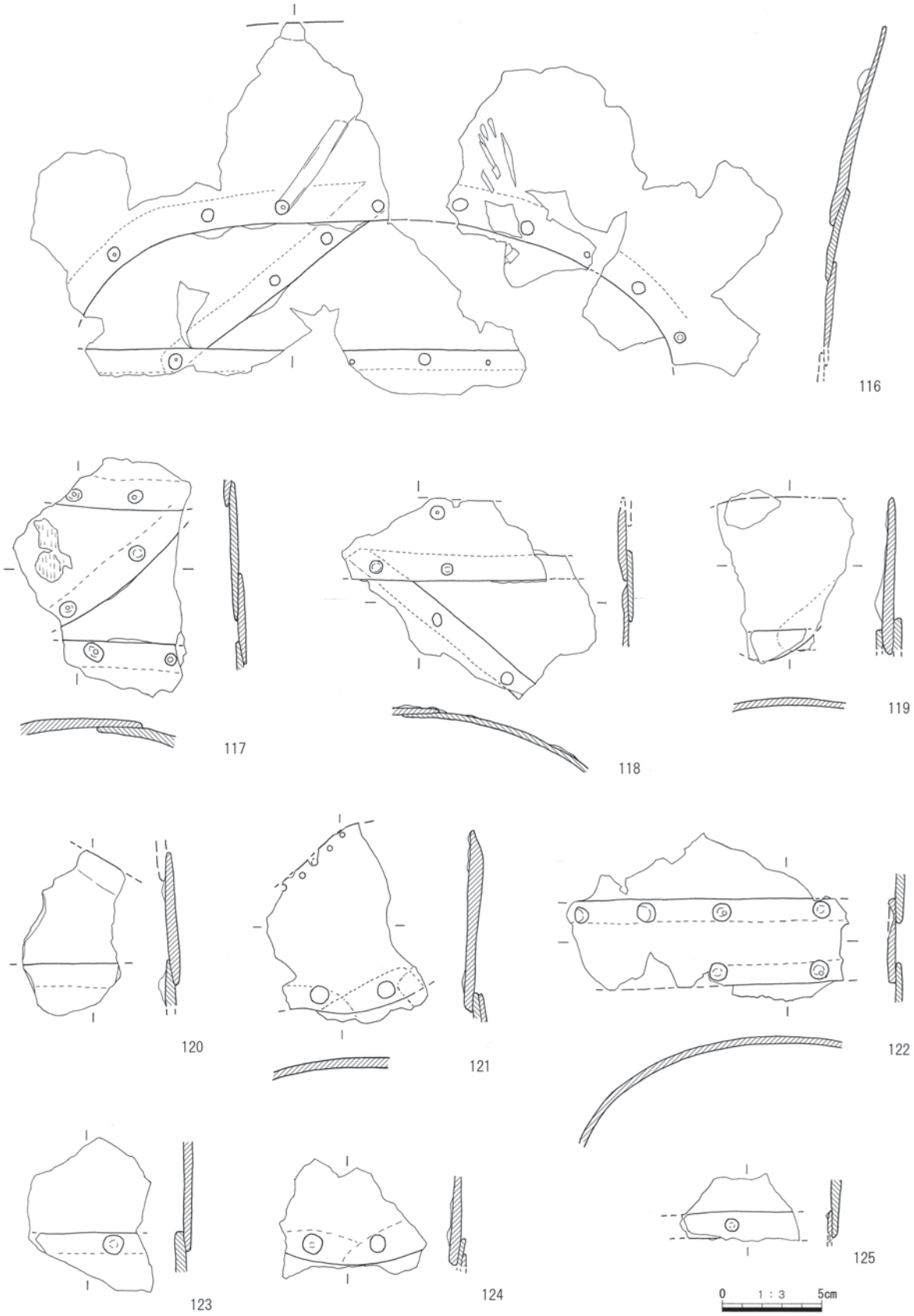


図9　短甲(1)　1：3

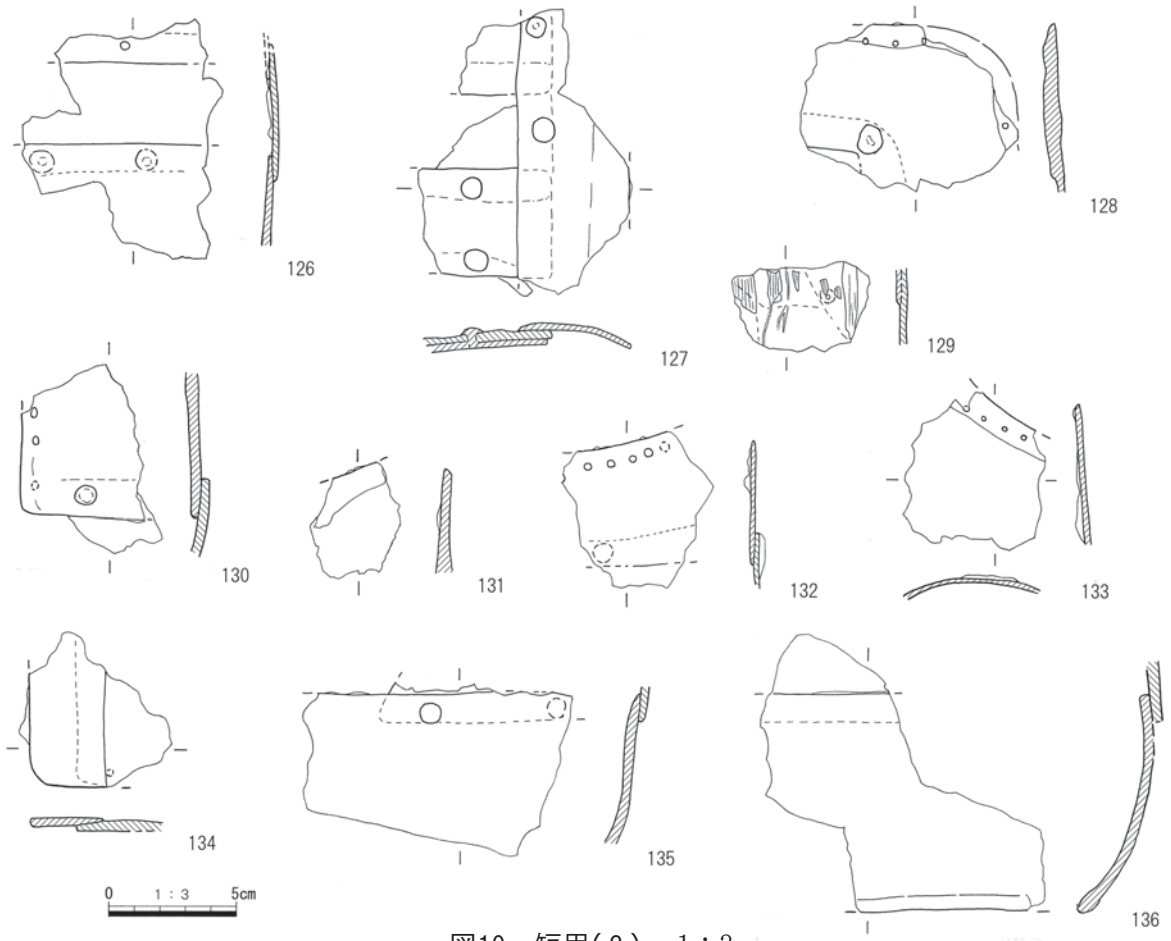


図10　短甲(2)　1：3

近い位置と思われる。134は蝶番板の下端か。

121・132・133などのように鉄板の端には小孔が七～九㎜の間隔で配置される。133では端から一㎝弱の幅で、131は小孔は見られないがほぼ同じ幅で銹の状態が変わっており、革包覆輪であったと思われる。135・136は裾板である。136の下端は細部を判断しにくい状態であるが、鉄包覆輪と思われる。

頸甲・肩甲（図11）　137～142・151は頸甲である。137は向かって右の前側、140が左の後側かと思われる。他は破片位置の推定がむずかしい。142は引合板の下端か。143は頸甲の一部と思われるが、左右に緩い反りをもつ点で140や141とは異なる。鉄板が鋲で留められる151は全体が平板であるが引合板と思われる。152は曲がりが強い。頸甲の一部と考えておく。

全体の形状が明らかでなく下端の形状がわからないが、137・140は側縁が中軸に対してかなり斜めになっており、頸甲編年の新しい段階に位置づけられる。

144～150が肩甲で、幅はいずれも三・一㎝である。側縁にそって威孔が配されている。145は二枚が部分的に重なった状態である。150では縁に木質が見られる。

（四）その他の器種（図12）

棒状の154はヤリガンナかと思われる。わずかに反りをもつ153はそれの先端付近か。図示した裏面の一部に木質が付くが、本来か二次的な付着か判断しがたい。155は縁を外反させる小片で、図の縦方向にわずかなカーブをもつ。156は薄い鉄板二つが銹でつな

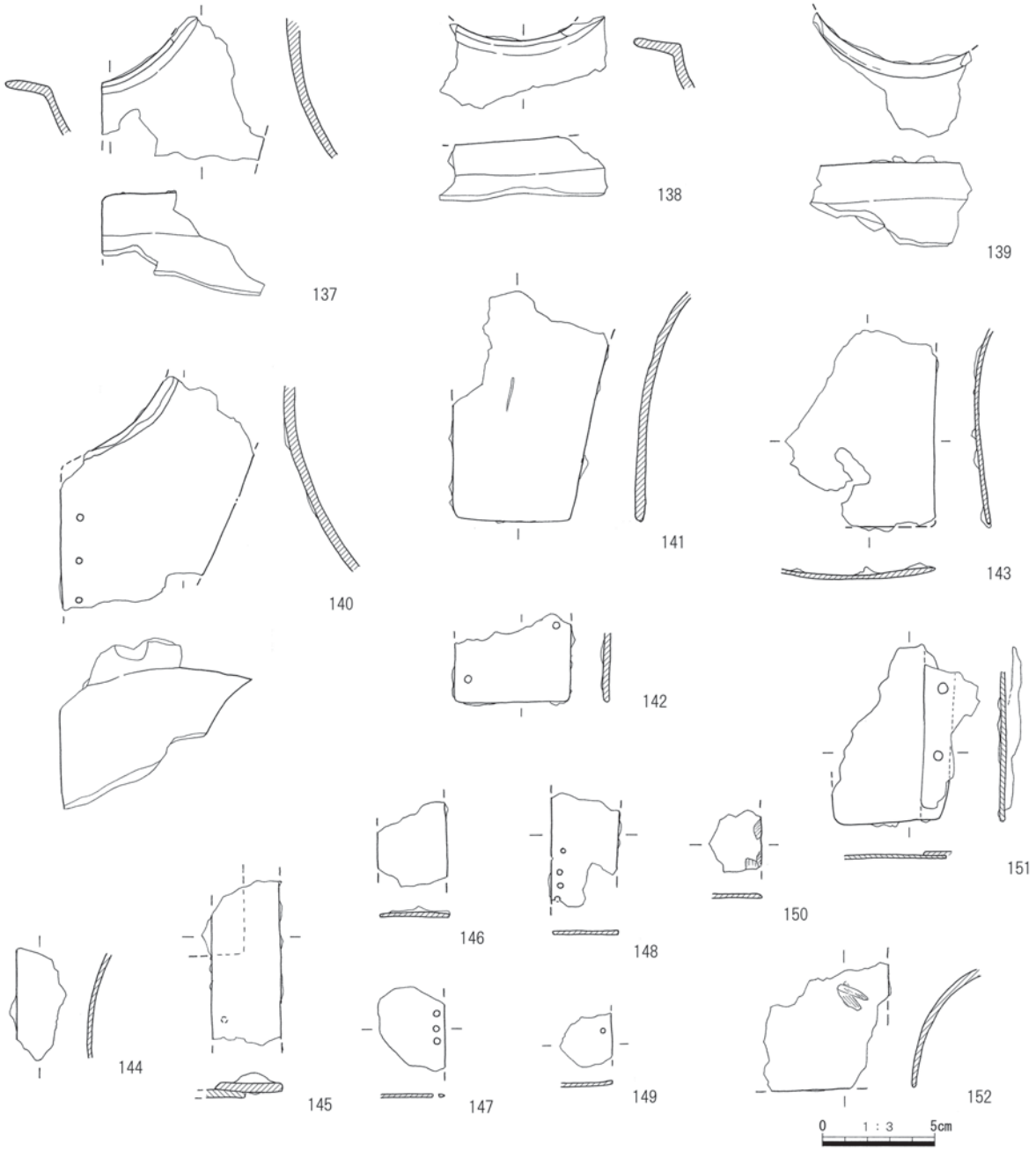


図11　頸甲・肩甲ほか　1：3

がっている。

157は絞具の破片と思われる。

158～160は鉄地金銅張の製品で、三点は同一個体とみてよい。159・160は短い破片であるが、比較的長い158を含めて側面形にカーブは認められない。158の下端は折れて曲がった状態である。半円形あるいはU字形の断面をなすが、幅は158が一四㎜、他が一〇㎜であり、徐々に幅を狭めると判断できる。鉄銹が表面の多くを覆うが、内面にも緑青が見られ、全体が金銅張かと思われる。159では外面に部分的に金が残る。159・160では内側に黒褐色の漆膜状のものが見られる。これは159では内面からは浮いて両端で接着しており、160では内面に付着した状態である。木質等は見られない。形状から鞍の覆輪と判断できるが、各破片の部位は明らかでない。

中期古墳で金銅装の鞍を副葬する例は少なく、大阪府誉田丸山古墳や

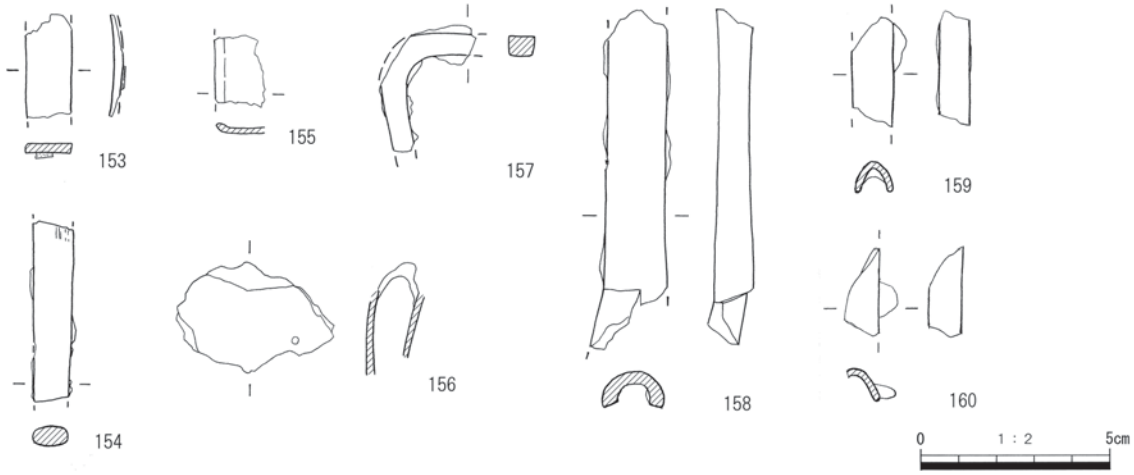


図12　その他の器種　1：2

同長持山古墳、和歌山県大谷古墳などが知られており、巨大古墳の陪塚や地域の有力墳である。資料は宿寺山古墳の位置を示すとともに、数少ない馬具資料として重要である(4)。

四　資料の性格

回収できた資料は以上である。本来の副葬品の一部にすぎないと思われるが、その構成の一端が明らかになった。

資料のうち、この古墳を特徴づけるのは、点数も多い鳥舌鏃(柳葉C式)である。鳥舌鏃は古墳時代中期の副葬鏃を特徴づける鉄鏃であり、百舌鳥・古市古墳群をはじめとする近畿地方中枢部の有力古墳から普遍的に出土しており、中期初頭に勢力をもった政権の中枢がその創出に深くかかわったと考えられている（鈴木二〇〇三）。

改めて述べるまでもなく、鳥舌鏃を副葬する古墳は畿内に集中し、大阪府野中古墳、京都府恵解山古墳以下の数多くが知られている。また、福岡県月岡古墳や南九州の古墳、東京都野毛大塚古墳をはじめとする関東、東海の古墳にも見られる。その一方、中四国に目を転じると、ここでは分布が僅少である。鳥舌鏃を副葬する古墳は、管見の範囲で徳島県恵解山二号墳、同国高山古墳、高知県長畝二号墳、鳥取県西浦山古墳、広島県吹越五号墳などが知られるにすぎない(5)。宿寺山古墳はこの地域において希少な存在といってよい。

宿寺山古墳の鳥舌鏃には高い比率で小さな円孔が見られる。円孔をもつ鉄鏃あるいは銅鏃は弥生時代後期末の資料から見られ（岩井

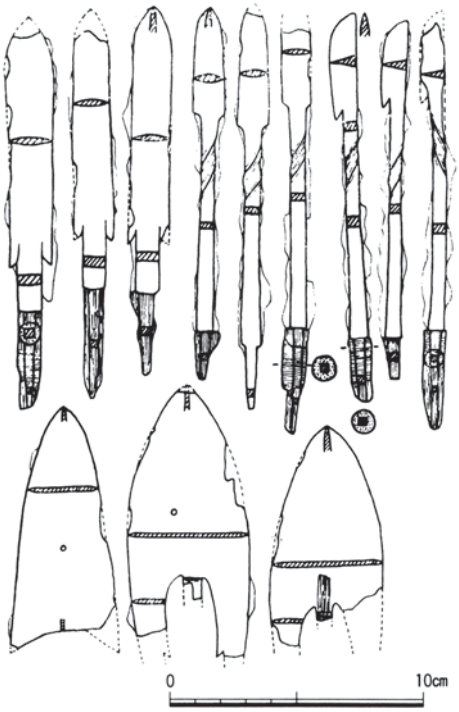


図13　随庵古墳出土鉄鏃　1：3

二〇〇六)、古墳時代前期では鉄鏃の形式はさまざまであるが、京都府椿井大塚山古墳や大阪府紫金山古墳、福島県会津大塚山古墳などの副葬鏃の一部で認められる。畿内の主要中期古墳では武器・武具が大量に副葬され、鉄鏃も大量に出土する例が多いが、そうした副葬鏃のうち大阪府アリ山古墳出土の二段逆刺鏃、京都府恵解山古墳の定角式鏃などでは複数の円孔が配される。特異な形状の二段逆刺鏃等に見られる円孔は、鏃の特殊性を強調するものと評価されている(鈴木二〇〇三)。

鳥舌鏃は、たとえば京都府恵解山古墳では出土鉄鏃四七二点のうち三二三点を占めるなど、副葬鏃の主体となる形式であるが、それに円孔を設けた例は、宿寺山古墳をのぞけば百舌鳥古墳群に属する大阪府城ノ山古墳と古市古墳群の藤の森古墳の資料が知られるにすぎない。城ノ山古墳が宿寺山古墳と同じ七期、藤の森古墳が続く八期で、三基の年代は近い。中期の後半に至って円孔をもつ鳥舌鏃が出現するのか、あるいはそれ以前からの様相であるのかが問題であるが、城ノ山古墳、藤の森古墳の両者とも調査の実施は古く、後に行われた資料再整理のX線写真撮影で円孔が確認されている。鉄鏃が大量に出土した古墳の調査の多くはかなり古い年次であることからすれば、それらの再整理を経なければ確定はむずかしいように思われる。いずれにせよ、小孔は武器としての機能にかかわるものではないうえに簡単に形成できるものでもないことからすれば、通常の鏃との差別化であり、儀仗としての機能をより高く表示したものといえるだろう。

吉備、広くは中四国の通常の古墳とは異なって、政権中枢の百舌鳥・古市古墳群の副葬鏃と共通の鉄鏃を副葬する宿寺山古墳被葬者の位置はある意味明瞭であろう。規格にすぐれたこの時期の短甲は畿内中枢で製作され列島各地に配布されたと考えられており、これは吉備では随庵古墳など中規模の古墳からも出土する。そうしたいわば基本的な品目に加えて、金銅装の鞍、また、鳥舌鏃を副葬しており、政権との密接な関係を知ることができる。こうした中央政権からの器財の授与、贈与に対して、受け手は服属や奉仕を行うことになる。宿寺山古墳の被葬者は吉備の西側を取りまとめ、政権に参画し仕える、そうした関係を鉄器群は表示すると考えられる。

資料は、出土遺物についての一連の手続きをへて、岡山県立博物館に収蔵している。

国立歴史民俗博物館永嶋正春氏にX線写真撮影をお願いし、資料の整理・検討に活用した。また、原稿作成にあたってライアン・ジョセフ氏、尾上元規氏、片山健太郎氏から多くの教示をいただいた。末筆ながら厚くお礼申し上げたい。

《註》

(1) 梅原氏は二日間でこうもり塚古墳、赤坂龍塚古墳、宿寺山古墳の三基を調査し、それぞれの墳丘や石室の図も作成する。たいへんな速さであり、その分、聞き取りに十分な時間がなかったなども考えられる。

(2) 葛原克人氏は一九六七年時点で後円部中央に小竪穴式石室の一部が遺存していたとし、森本氏の見解を支持する(葛原二〇〇三)。しかしながら、「後円部第二石室」は一九二四年の調査時に残存していたわけではなく、聞き取りから

の推定である。さらに別の石室があったのか、石室石材を利用した石垣ではなどの疑問も生じ、理解は困難と言わざるをえない。

(3) 古墳に放置されていた鉄器は森本六爾氏がもらい受けており、それには鉄鏃も含まれるようで、本来の数は多くなる。

(4) 鞍覆輪金具については片山健太郎氏から詳細な教示を得た。

(5) 『岡山県史』掲載の天狗山古墳出土遺物図には鳥舌鏃一点の掲載があるが、東京国立博物館資料の調査では確認できず（松木ほか二〇一四）、他古墳の資料図が混入したとみられる。それが岡山県関係とすれば、宿寺山古墳以外にも鳥舌鏃を副葬する古墳が所在する可能性がある。

《引用文献》

・岩井顕彦「有孔鉄鏃からみた古墳副葬鉄鏃の系譜」『考古学研究』第五三巻第二号、五四－七二頁　二〇〇六年
・宇垣匡雅「宿寺山古墳の研究（一）」『環瀬戸内海の考古学―平井勝氏追悼論文集―』、二三九－二五八頁　二〇〇二年
・宇垣匡雅「周濠の地方伝播に関する一試論―吉備の事例を中心に―」『天狗山古墳』、一二九－一三七頁　二〇一四年
・梅原末治「備中都窪郡の二三の墳墓に就いて」『歴史と地理』第一五巻第一号、一〇九－一三一頁　一九二五年
・大阪大学大学院文学研究科編『野中古墳と「倭の五王」の時代』大阪大学出版会　二〇一四年
・尾上元規「古墳時代中期鉄鏃の編年と地域性―中国四国地方を中心として―」『中期古墳研究の現状と課題Ⅰ―広域編年と地域編年の齟齬―』中国四国前方後円墳研究会第二〇回研究集会発表要旨集・資料集、六一－七二頁　二〇一七年
・鎌木義昌・間壁忠彦・間壁葭子『総社市随庵古墳』総社市教育委員会　一九六五年
・川畑　純『武具が語る古代史』京都大学学術出版会　二〇一五年
・葛原克人「宿寺山古墳」『山手村史資料編』、七一－七四頁　二〇〇三年
・小森牧人・鈴木康高「同志社大学所蔵堺市城ノ山古墳出土資料調査報告（一）」『同志社大学歴史資料館報』第一二号、二三－四六頁　二〇〇八年
・齊藤大輔「古墳時代中期刀剣の編年」『中期古墳研究の現状と課題Ⅰ―広域編年と地域編年の齟齬―』中国四国前方後円墳研究会第二〇回研究集会発表要旨集・資料集、七三－八八頁　二〇一七年
・鈴木一有「交易される鉄鏃」『表象としての鉄器副葬』第七回鉄器文化研究集会発表要旨集、七五－九四頁　二〇〇〇年
・鈴木一有「中期古墳における副葬鏃の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第一一集、四九－六九頁　二〇〇三年
・長岡京市教育委員会『国史跡恵解山古墳の調査』長岡京市文化財調査報告書第六二冊　二〇一二年
・藤田和尊『古墳時代の王権と軍事』学生社　二〇〇六年
・藤田道子「藤の森古墳から出土した鉄製品」『大阪府教育庁文化財調査事務所年報』二三、一八－二三頁　二〇一九年
・松木武彦・和田剛・寺村裕史ほか『天狗山古墳』岡山大学考古学研究室・天狗山古墳発掘調査団　二〇一四年
・水野敏典「古墳時代中期における鉄鏃の分類と編年」『橿原考古学研究所論集』第一四　八木書店、二五五－二七六頁　二〇〇三年
・森本六爾「備中における金釵発掘の古墳」『中央史壇』第一二巻第六・七号、四八－六一・七〇－八五頁　一九二六年